

The Blithedale Romance における語りと 降神術とフェミニズム

中 村 正 廣

The Blithedale Romance (以下 BR と略す) が出版された頃のアメリカは相次ぐ新発明や技術進歩に育まれた進歩思想が席卷していた時期であり、1837年の経済恐慌のために都市部に貧民層が出現、犯罪が増大した中において、犯罪人の社会復帰、売春婦の保護、孤児や貧困者の世話などのために多くの慈善団体が生まれ、ユートピア建設運動が頻繁に行われた時代でもあった⁽¹⁾。ホーソーンが参加したブルックファームもこのような急進的理想共同体のひとつであった。さらに1848年に始まった降神術は魂がらせん状に上昇し、神と天使が住む最上天の「第七天」⁽²⁾に達することを保証する契機ともなり、至福千年思想を助長したため、ユートピア的共同体に歓呼して迎えられた。

本稿の目的は、このような社会状況の中で現れた降神術と女権思想に焦点を当て BR の語りについて考察することにある。一見無関係に見える降神術と女権思想が BR の語りとどのような関係を持ち、そしてそれらが BR においていかに組み合わせられ、さらにはホーソーンの芸術観、女性観とどのような係わりを持つのかを見て行きたい。

(1)

BR にはメスメリズムと降神術に言及している箇所は三か所ある。まず第一章「ムーディ老人」ではヴェールをつけた女性の演技の新旧比較が描

写される。「十二年か十五年前」はヴェールをかぶった女性のショーは「新しい科学の誕生あるいは昔のいかさまの復活を思わせる初期の」⁽³⁾ものでメスメリズム的趣向で行われており、「実験者は奇跡としか見えないものを日常の出来事と可能な限り著しく対比させるために、あらゆる趣向を凝らした神秘的で画趣に富む配備、芸術的に組み合わせた光と影を利用した」(6)が、「現在」のショーでは、即ちカヴァデイルが物語る時点では「科学的実験の単純素朴さ、かつ隠し立てのない態度を装い、霊界の領域に一二歩踏み込んでみせると公言するときでさえも、実験者は我々の現実界の法則を保持していて、霊界の征服にそれを拡大してしまう」(5-6)とカヴァデイルは説明している。

「十二年か十五年前」といえばアメリカでメスメリズムが隆盛した1830年代から1840年代に言及しているのは明らかだが、このことはゼノビア、プリシラ、ムーディの関係を暴露する第二十二章「フォントロイ」でも繰り返し説明される。「中部大西洋岸州のひとつの州」出身の父のフォントロイ、つまりムーディがボストンで再婚して生まれたプリシラは、「西部出身の青白い少女」(187)であり、野卑な近所のアイルランド人女性たちから「千里眼と予言力」(187)をからかわれているが、これはニューヨーク州北部のハイズヴィル（ボストンの西方）のフォックス姉妹を暗示している。カヴァデイルはこの状況について当時は「昔は幾分信用を得ていたが、現代の懐疑主義がくだらぬものとして一掃した多くの事実や不完全な理論を科学が（もっともそれはやぶ医者的な先生たちが大体やっていたのだが）新たに蘇らしていた」(187)時代だと明言している。これはまさしくアメリカ革命の頃フランスで開業していたオーストリア人メスマーの動物磁気催眠術への言及であり、B. フランクリンら合理主義的色彩の強い委員たちによってインチキ療法との裁定を下されたメスメリズムがこの頃復活したと言うのだが、これがフォックス姉妹と暗黙のうちに結びつけられているのだ。

カヴァデイルが第一章で見た「神秘的で画趣に富む配備、芸術的に組み

合わされた光と影」、さらにはやぶ医者的な先生たちが復活させていたとはいえ、第二十二章で「幾分信用を得ていた」ところがあったとされるメスメリズムの長所は、第二十三章「村の公会堂」でカヴァデイルが目あたりにするヴェールをつけた女性の演技には全く見られない。彼女の演技をきらびやかに演出する多くの手の込んだ舞台装置も全くない。カヴァデイルはポルタガイストやメスメリズムを取り込んだ1850年代の降神術の時代が物語のこの時点では到来していないと言いながらも、壁をとんとん叩いたり、目に見えない力でテーブルがひっくり返ったり、ユダヤハープが不気味な音楽を奏でたりする降神術の特色について、強迫観念に囚われたかのごとく詳述するのだ。追い討ちをかけるかのようにウエスタヴェルトは魂と魂を結び、現世と来世をつなぐ新時代の幕開けを言明する。つまり、カヴァデイルが第一章で弁護したメスメリズムが、第二十三章において降神術と同次元に貶められている事実を彼自身が暴露しているのである。「青白い男」は「ある人間が他の人間の意思や感情に対して持つ奇跡的な力」(198) の実例について彼に淡淡と耳うちし、彼を驚愕させ呆然とさせる。

It is unutterable, the horror and disgust with which I listened, and saw, that, if these things were to be believed, the individual soul was virtually annihilated, and all that is sweet and pure, in our present life, debased, and that the idea of man's eternal responsibility was made ridiculous, and immortality rendered, at once, impossible, and not worth acceptance. (198)

ホーソーンの妻ソフィアがまだ婚約者だった頃慢性的な頭痛の治療法としてメスメリズムに関心を見せ実際に治療を受けた際、ホーソーンが衝撃を受け、神聖なるものの中で最も神聖なる魂が犯されるとして懸念と疑いを手紙にしたため彼女に書き送ったことは有名だが、カヴァデイルが降神術に対して抱く恐怖と嫌悪感と苛立ちはまさしくホーソーンのそれでもあ

る⁽⁴⁾。

ではカヴァデイルがこれほどまでにメスメリズムや降神術に拘泥するのはなぜなのか。ホーソーンが当時流行の題材を俎上に載せていることは確かだとしても、さらに重要な意味合いがあることは誰の目にも明らかである。つまるところカヴァデイル自身がブライズデイルについて語る時と同様のことをやっていると意識しているからなのだ。最終章「マイルズ・カヴァデイルの告白」は、ホーソーンがE. P. ホイップルに原稿を見て貰った後に付け足されたものであり、初め第二十八章「ブライズデイルの牧草地」がBRの結末であったことはほぼ間違いない。ゼノビアの葬式に関するこの章では、ゼノビアの死後数年してカヴァデイルがホリングズワースとプリシラを訪ねた事件のことまで言及された後に、自分が「ゼノビアの墓の前に佇んで」(243) 語っていたとカヴァデイルは明言している。ゼノビアの死体をカヴァデイルは「十二年以上もの間、私の記憶の中に抱き続け、そして未だに目のあたりにそれがあるかのように生き生きと、私はその時の恐ろしい様子を再現できる」(235) のであり、ゼノビアの「実物よりは少し青白いが、それ以外は実物と同一の幽霊」(15) を呼び出し交霊しつつカヴァデイルは語っているのである。

カヴァデイルの語りと降神術の深い結びつきを示唆するかのように、BRでは想像力と交霊の比喩として葡萄の蔓が二回使われている。最初の蔓はカヴァデイルの庵の描写の場面に現れる。カヴァデイルの庵は「個性を象徴しており、その個性を神聖なままにしてくれる」場所だが、「並はずれて大きく、また並はずれた繁り方をしている野生の葡萄の蔓」(98) が互いに絡み合い、隣接する三、四本の木々と「あたかも一夫多妻制のように複雑に絡み合い結びあって」(98) できたものだ。フーリエが挙げている三種類の情動の第一に当たるこの性的放縦とも言うべき感覚的情熱は、第二段階として愛と集団を求めるが、果たしてカヴァデイルは花嫁を夢想し、葡萄の木の葉の間を流れる風の超絶主義的リズムを感応しつつ葡萄の豊作を予想し、十月の妖精となって皆の前に現れることを夢見るのだ。

「官能的効果」(101)の最終段階としてフリーエが挙げる陰謀と不和への情熱は、カヴァデイルに突然世の中を改革しようとする努力の精神的美しさや英雄の行為がいかに愚かしいことかを示唆する。ところがフリーエと違い、カヴァデイルにはこれらがより合わされて最も美しい複合的な情動は現れないどころか、冷たい懐疑主義を意識させる結果に終わるのである⁽⁵⁾。

蔓の比喩が次に現れるのはプリシラの過去が説明される第二十二章「フォントルロイ」である。カヴァデイルの庵を覆っていた葡萄の蔓は、ここではプリシラのゼノピアへの愛情の比喩として用いられ、これまたゼノピアという若い木にまとわりつく。しかしこの葡萄の蔓は酩酊や肉欲を象徴するような「官能的」なものではなく「より清純な雰囲気をもつすがすがしさ」(186)があり、「心から愛している人と人間的繋がりを求めることができる」(186)ものなのだ。貧困と恥辱の中に喘ぎながらも、内面に「高尚かつ想像的人生」(186)を持っていたがゆえにプリシラは個性的で価値ある人間として存在し得たのである。だがここでも想像力の比喩としての蔓は単純な次元に終始はしない。臆病で虐げられた当時のお針子の典型とも言える「孤独で、おとなしい、ひ弱な」(185)な母親から「人を愛する、深くて静かな能力」(186)を受け継いだプリシラのゼノピアへの愛情は、妻子を捨てることも気にかげず過去の栄華を夢見るムーディ、極論すれば過去の栄華の象徴である最初の妻には触れてもプリシラの母は全く無視するムーディが、御伽話代わりにプリシラに吹き込んだ結果であり、このプリシラの霊媒能力はムーディの夢を償うものとして生じたものでもあるのだ。プリシラは魔法使いのウエスタヴェルトに囚われの身であり、白いヴェールを着けさせられ、意のままに動く霊として服従させられているのであり、男性に様々な夢を読み込むように誘うことになる。言うなればプリシラは真の透視者というよりは魂を男性に犯された奴隷に近い霊媒なのだ。そしてソフィア宛のホーソーンの手紙の中の一節、「神聖なるものの中でも神聖なものに侵入する者があり、それがあなたの夫でないかもしれ

ぬ」⁽⁶⁾を合わせて考慮すれば、催眠術をかけられるということには性的搾取の意味合いが多分に含まれているのである。

以上の二種類の葡萄の蔓の比喩が描出しているのは、前者は調和のとれた情動に至らず自己否定にまで突き進む想像力であり、後者はヴェールをつけた女性のように他者に搾取される人間のそれだ。両者ともにカヴァデイルの語りの逡巡を象徴している。カヴァデイルが垣間見せるニュー・イングランドの性格は、降神術の靈魂を「昔の者たち、追放された者たち、役立たずの者たちの影にすぎぬのであり、永遠の世界に住むには価値ないと宣告された者たちであって、どんなに高く評価したところで、次第に無へと消え失せてしまうような者たち」と捉え、「私達が彼らの運命を繰り返さないようにするためにも、私達は彼らに語るべきことが少なければ少ないほどよいのだ」(199)と彼に思わせる。同時にカヴァデイルはゼノビアを前にして彼女の媒体と化してしまうかもしれぬという恐怖に常に晒されているのだ。

このような極度の懐疑にあって、カヴァデイルが頼りとするのは「十二年か十五年前」のヴェールをつけた女性の演出方法である。「その特異なパフォーマンスを神秘的なものにし、かつ解明するような舞台効果を持つ巧く工夫された状況」(5)を醸し出すことだ。まさしく「十二年か十五年前」の頃のホーソーン作品、語り手が狭い通路を通り、かつての植民地の総督邸を背景とし、別の二人の語り手の話を自分なりに脚色し、そのことを明言してもそれ程懐疑的にならずにすんだ作品、ヴェールを剥ぐ女性、ヴェールをつけた女性、娯楽的仮面舞踏会を破壊する仮面行列、コーラスの機能を果たす人物等が存在し、ブルックファームをも襲った天然痘でポストン社会に壊滅的打撃を与えた女性に語り手が共感を示した物語、即ちホーソーンが1838年に発表した「植民地総督邸の伝説」を語り手カヴァデイルが意識していると言ってもよい。この総督邸にカヴァデイルはウエスタヴェルトに姿を変えて(カヴァデイルは自分をウエスタヴェルトに二重写しにすることを幾度も行っている)乗り込んで行くが、しかしBRは「植

民地総督邸の伝説」とは全く様相を異にし、誰もカヴァデイルを温かく迎えてくれないのだ。

BRの第一章で展開されるメスメリズムの新旧比較は「神秘的にしつつ解明する」やり方と「科学的実験のもつ単純素朴さ」のコントラストにある。前者はメスメリズムに意味を見いだし、後者は「現実界の法則」で霊界を切るという否定的態度、つまり降神術への懐疑的姿勢から生まれたものだ。カヴァデイルはゼノビアを含む外界に対して実験者、興行師として前者を主張しつつ、透視者としての権威を認識させようとするが、魂を侵害するだけではないかという自らの懐疑的姿勢のために、後者という現実認識の辛酸を味わわされていくのである。カヴァデイルは魂と魂を結ぶ新時代を謳歌するウエスタヴェルトの中に、冷たい懐疑主義の世間全体を代表するもうひとりのウエスタヴェルトがいることを意識せざるを得ない。このもうひとりのウエスタヴェルトの目を通して、ホリングズワースの囚人更生の夢を懐疑的に眺め、ゼノビアの現世的気高さ、プリシラの優美な繊細さすらも異常な目で眺めていたと思われて仕方がない。このような状況下で出来事に影響を及ぼすだけの力を持たない「古典劇のコーラス」(97)を目指そうとしても、そのような選択肢は彼に残されていないのだ。人間的係わり合いを避けて超然としながら、他の人間たちの運命に対して、すべての希望と恐怖、歓喜と悲しみだけを授けることなどできない相談なのだ。ひとり冷静沈着な傍観者の存在を確保しつつ舞台の場面を変え、劇を進展させる「最も巧みな舞台監督助手連」(97)の役割を担う運命神に倣うことは、自らの語りには逡巡するカヴァデイルにはできるはずもないのである。人間的係わり合いの中に埋没し神聖な個性を枯渇させてしまうか、ひとり淋しく回りを徘徊するしかないのだ。人間的係わりを否定して蔓を伸ばせば、「血と肉を備えた悪鬼」(157)たるゼノビアは、「神の摂理を押し退け、自分自身をその恐れ多い地位に代わりに置こうとする極めて不敬な性質」(170)だと彼を攻撃するのだ。いやそれどころか、その「血と肉を備えた」はずの悪鬼が、彼が村の公会堂で嫌悪する降神術の「悪鬼」(199)

に変身し、血と肉さえ持たぬ無用の長物と化すかもしれないのだ。

カヴァデイルはこのためゼノビアの死を闇雲に求める。ゼノビアの死という大団団に執着するカヴァデイルの意識の分析は第三節に譲るとして、カヴァデイルはゼノビアの死によって判断停止を求める方向を選択せざるを得ないのだ。彼がブライズデイルについて語り始めるとき、彼の脳裏にあったのはゼノビアの死であった。神に祈っているかのごとく膝まづきながら、両手は神に逆らっているかのように見える彼女の死体の異常な姿勢は、このロマンスの結末であるとともに出発点でもあった。しかしながら、いやそれゆえに、この大団団はカヴァデイルの物語を収拾するものではなく、再び物語は導入部である第一章、「私はこの謎を私の心の中で反芻し、その謎の意味を何とかして解明しようとしている」(6)場面(勿論これは彼がブライズデイル共同体の成否についてヴェールをつけた女性に尋ね、そのとき返ってきた謎めいた答えのことを指しているが、カヴァデイルがその成否を問うているロマンスと重なり合うのは言うまでもない)に戻って行くのである。後でホーソーンが最終章「マイルズ・カヴァデイルの告白」を付け足したのはこの回転を断ち切るためであったと思われるが、最終章のカヴァデイルが告白していることはそれまでの自分を掻い摘んで描写しているだけのことであって、第二章「ブライズデイル」で参加者カヴァデイルと語り手カヴァデイルが混交する場面を再現しないという保証にはならないのだ。

(2)

カヴァデイルが自分の語りと切り離せないものと認識している降神術は、1850年代社会改革者の至福千年思想を助長するが、これは社会主義、人種差別廃止と並んで女性の権利、自由恋愛などと結びつけられた。1848年ニューヨーク州で男女平等宣言を行った全米女権拡張大会以来、フェミニスト運動は1850年代には大別して女権主唱者と自由恋愛を熱狂的に求めるグループに分かれていたものの、攻撃する側からは混同された⁽⁷⁾。その

中でも代表的なカトリック教徒のO. ブラウンソンは降神術、フリーエ主義、女性の権利、社会改革の原動力は悪魔であるとした *The Spirit-Rapper: An Autobiography* (1854) を書いている。その彼はBR 書評の中でムーディ老人とホリングズワースを成功した人物描写とし、特にホリングズワースを評価してカヴァデイルの女性観を非難しているが、女性を「衝動的生き物」で、愛を渴望するというよりは強い感情を求め、それがどの対象に向かうかは重要ではなく、最も強い感情（これは十中八九怒りか悲しみの感情だが）を与える男性の虜になる存在⁽⁸⁾と決めつけ、自殺という向こう見ずな振る舞いは、財産を失い自分の趣味を満足させその虚栄心を満足させる術を失ったからであり、これすらも甚だ非女性的であるとしている。ヴィクトリア朝の小説では父権社会の枠組みから抜け出る女性は、病死、狂死、溺死、死刑というむごい結末を与えられることが多いが、ブラウンソンはまさしくゼノビアを熱病、肺結核、疫病、コレラ等の病気や凶漢によって殺すべきだったとしている。その結果BR には慈善事業や共産社会的共同体への「静かなサタイヤ」⁽⁹⁾しかないとは彼は結論するのだ。

一方現代のフェミニスト学者から見れば、BR は社会改革へのサタイヤであり、L. デサルヴォに言わせれば、禁酒、精神異常者の治療、刑務所の改良、反奴隷運動、女権運動に邁進したホーレス・マン（妻ソフィアの妹婿）へのライバル意識から生まれたものとされるのである⁽¹⁰⁾。ホーソンの時代にあっても保守派の代表であったブラウンソンと現代のフェミニストという大きな違いこそあれ、カヴァデイルの微妙な語りがこの相反する評価を生み出していると言える。以下カヴァデイルの語りが女権思想とどのような関係にあるかに焦点を絞り論を進めて行こう。

カヴァデイルにとってゼノビアが自由恋愛や女権思想の温床となったフリーエ主義や降神術を背景としたブライズデイル共同体を代表することは、ブライズデイルに到着した直後のカヴァデイル自身の言葉の中に窺える。ブライズデイル共同体は「強欲で、闘争的で、かつ利己の世界から離別し」(20)、文明の諸悪の根源である抑圧から情動を解放し、望む者には

一夫一婦主義の否定すらも容認するフリーエ主義的世界である。

While inclining us to the soft affections of the Golden Age, it seemed to authorize any individual, of either sex, to fall in love with any other, regardless of what would elsewhere be judged suitable and prudent. Accordingly, the tender passion was very rife among us, in various degrees of mildness or virulence, but mostly passing away with the state of things that had given it origin. (72)

この自由な恋愛感情の権化とも言うべきゼノビアは、その「自由で自然でおおらかな表現方法」(17)によって絹のカーチフと服の間に白い肩がのぞいているのをカヴァデイルに意識させ、ほとんど衣服をまともなイメージを思い起こさせる。彼女には「純粹なものではあるものの、男女間で交わされる思考から生まれた時には完全には品がよいとは言いがたいようなイメージを生み出す」(17)ところがあるからこそ、女性の生命力を奪っている様々な束縛を軽蔑し、これに反逆できるのだ。「情熱的で芳香のある雑草」(45)に満ち溢れているからこそ、「あらゆる人間の社会制度を覆すことも躊躇しない」(44)のだ。こうして女性の権利はカヴァデイルによって性的放縦と結びつけられる。ゼノビアがいるだけでプライズデイル共同体の英雄的計画ですら「一つの幻想、どこかの舞踏会、田園詩、あるいは、偽りのアルカディアのごときもの」(21)になってしまうのだ。

「女性に課せられた狭い制約と戦い傷つく高邁なる精神を持った女性」(2)とホーソーンが説明するゼノビアは、以上のようにカヴァデイルによって自由恋愛と結びつけられ、官能的な女性として読者に提示されるが、ではどのような経歴が現在の彼女を確立させたとカヴァデイルは見ているのだろうか。彼女の過去を紐解く章はメスメリズムの復活を描写したあの第二十二章「フォントルロイ」だ。ゼノビアの母はお針子であったプリシラの母とは違い、金持ちの美しい女性で、生来の高潔さを持った女性であっ

た。恐らくは北部諸州の敬虔さと美德の旗手であったと思われるが、父の「外面を美しく飾るもの」(182)でしかなかった。ゼノビアはこの「母の世話が欠け」、それ故に「あらゆる面で適切な指導」を受けなかったために、「主として土壤に繁茂し優美な草花を枯らしてしまっただ雑草」(189)が彼女を覆い、情熱的で、わがままで、傲慢でありながらも、思いやりがある女性となった。つまり「良い面も悪い面」(189)も持ち合わせた女性、つまり男性の飾り物に満足しない女性であった。このようなゼノビアの性格はウエスタヴェルトとの結婚という失敗を通してさらに研ぎすまされたものになっていき、現在の彼女ができあがったのである。彼女にとってプリシラは「男性が何世紀もかかって作り上げてできた女性の象徴」(122)であり、プリシラの霊的な面もゼノビアには「狭苦しい部屋で、携帯用のストーブの熱で息苦しい思いをさせられ」、生きているのか死んでいるのかわからないような状態になってしまった結果の「青白さ、神経過敏症、虚弱さ」(34)にすぎない。プリシラを売春婦と見る解釈がまかり通るほど彼女は男性に搾取された存在なのだ⁽¹¹⁾。と同時に男性中心社会の中で女性が生き残るための唯一残された手段でもある。フェミニストの言葉で表現するならば、父権社会からの使者、父の娘としてのプリシラは、母ゼノビアをギリシア悲劇のエレクトラ同様に窒息させる存在であり、だからこそ、ゼノビアは美しく飾り立てたプリシラの髪に「悪臭のする醜い雑草」を「これみよがしに」(59)に挿入してみたくもなるのである。

女性の権利と女性の性的放縦との関係は、「官能的」世界を象徴する葡萄の蔓に囲まれた庵と森の仮面舞踏会によってさらに強化される。超絶主義のシンフォニーを奏でる庵の蔓は一夫多妻または一妻多夫を想起させ、パッカスの恍惚感を与え、仮面舞踏会はコマスの酒宴(短編「メリーマウントの五月柱」では千鳥足の野獣の集団に譬えられ、ピューリタンの価値観とは敵対関係にある)を想起させる。さらに庵から葡萄の房に飾られて出ていくことを夢想するカヴァデイルは自分をオクトウヴァーに譬え、舞踏会を見て狼狽するときは相手からアクタエオンに譬えられるが、J.

シュルターの指摘によれば、これはスペンサーの *Two Cantos of Mutability* 中のファウヌスとオクトウヴァーに近い¹²⁾。アルテミスの妖精の一人を買取して彼女の水浴びしている裸体を見たファウヌスは鹿の皮を着せられ追われる。葡萄酒に酔いしれ、肉欲に満ち、浮かれ騒いでいるオクトウヴァーは、アルテミスを犯さんとしたオリオンをアルテミスが殺すときに使うさそりにまたがっている。これらは男性の生殖的エネルギーに誘いをかけると同時に、それを盗み取ってしまう女性ゼノビアに対する矛盾したカヴァデイルの思いを適切に暗示する比喩と言えるが、同時にこの肉欲、性的願望はゼノビアと同じく背が高く、美しく、高慢な女性改革家 *Mutabilitie* のテーマと結びつけられている。Mutabilitieはゼウスによる男性支配とアルテミスの権力に反乱を起こそうとしてゼウスに阻止され、実り豊かなあずまやを美しい平地に設けた自然の女神に訴えるが、スペンサーの世界にあっては敗訴する運命にある。ではBRの世界ではカヴァデイルの自然はどのような結末をゼノビアに与えているだろうか。カヴァデイルは最終章の直前の第二十八章の終わり、自然の女神は何事もなかったようにゼノビアを吸収したと語る。

Will not Nature shed a tear? Ah, no! She adopts the calamity at once into her system, and is just as well pleased, for aught we can see, with the tuft of ranker vegetation that grew out of Zenobia's heart, as with all the beauty which has bequeathed us no earthly representative, except in this crop of weeds. (244)

しかし自己解体の危機に瀕するカヴァデイルは、「鉛錘線を彼女の意識の深淵に降ろしてみよと挑みかかる」(48)ゼノビアを前にして「キマイラに追われる狂った詩人」(211)のごとく逃げ惑うしかなかったのであり、最後まで実験者と霊媒の立場が逆転した状態は持続されており、その意味ではスペンサー的な確固とした男性中心社会にゼノビアが完全に飲み込ま

れて、カヴァデイルに平穩が戻ったとは考えられない。

ゼノビアの霊と交わることにセオドアと同じように躊躇している父権社会の運命神たるカヴァデイルは、父ムーディ、父の娘プリシラ、父権社会の父ホリングズワースの三人がゼノビアを殺したことを暗示するが、同時にカヴァデイルには自分がプリシラ同様ゼノビアにとって蔓であり「寄生植物」(123)であり、ゼノビアの生命力を型にはめ、窒息させたという意識がある。「寛大な同情心によって、また、繊細な直観によって他人の生活に入り込み、その人自身にも分かっていない秘密を嗅ぎ取ろうとする」(160) カヴァデイルが、いかに優しくまわりついていると強調しても、ゼノビアの首を絞めていることに変わりはなく、ゼノビアに情熱の枯渇と死を意味する黒のヴェールを運命神として強要したという意識がカヴァデイルから消えない。と同時に、カトリック教徒のブラウンソンと違い、カヴァデイルはゼノビアを改悛させ、生きながらの死とも言える尼僧に追いやることはしない。自分自身で殺すことによってゼノビアの存在を否定しないという逆説により、カヴァデイルは自らの語りを永遠に回転させることができ、永遠に自分を苦しめることで自分の存在を主張できるのである。そしてこの意識こそがこのロマンスを曖昧なものにし、ゼノビアを殺から解放しているのである。運命の権化カヴァデイルにとって、ゼノビアは「語るべきことが少なければ少ないほどよい」「昔の者たち、追放された者たち、役立たずの者たち」(199)であればあるほど、多くの言葉をカヴァデイルに強要し、そしてそれでも抜け落ちてしまう存在なのである。

(3)

第一節、第二節を通してBRの語りがカヴァデイル殺人説⁽¹³⁾を生み出しうるほど自己解体の危機に瀕していることを中心に、語りと降神術、女権思想との関係について述べてきたが、ここではカヴァデイルの女性観に焦点を当て、さらにカヴァデイルの語りを分析して見たい。

カヴァデイルにとって女性は天使か妖怪のいずれかに属さなくては安心

できない。しかし、プリシラですらこの範疇にじっくり収まらないことはカヴァデイル自身認識している。プリシラの肩の線と探りを入れるような挑発的な目は姉ゼノビアを想起させる。特に「両肩の曲線と半ば閉じられた両眼」(51)は相手を魅するマーガレット・フラーの黒い眼の特徴を暗示するが¹⁴⁾、しかし、少女プリシラの場合、フラーに似ていると面と向かって彼女に告げ怒らせることによって、霊的存在として確保すること、魔女の影を無視することはまだ可能である。カヴァデイルによれば、少年は一定のやり方に従って古くからの伝統的な遊びをするものの、常に野蛮になる傾向があるが、女子は次の点で少年とは大きく異なるとまだ自分に納得させることは可能だ。

Girls are incomparably wilder and more effervescent than boys, more untameable, and regardless of rule and limit, with an ever-shifting variety, breaking continually into new modes of fun, yet with a harmonious propriety through all. Their steps, their voices, appear free as the wind, but keep consonance with a strain of music, inaudible to us. (73)

このように女子の本質に調和と礼節を求めることで、カヴァデイルはプリシラを天使的女性の範疇に収めることができる。

ゼノビアは男性の庇護を必要とする、献身的で、従順で、没我的で寛大な女性の範疇から漏れ出る。ゼノビアの「ある種の温かくて豊かな特質」は「特別な優しさ、優美さ、しとやかさ、恥じらい」(17)といった父権社会が求める特質とは異質であり、女性の体から洗練されて霧消してしかるべきものである。創造されたばかりのイヴやパンドラのイメージで捉えられるゼノビアを、カヴァデイルは伝統的女性観のもう一方の極にある魔女として把握しようとする。「女らしさの権化」(44)たる彼女を「ヴェールをつけた女性の姉妹」(45)に閉じ込め、ゼノビアの火と肉体のイメー

ジを「大理石の冷やかな上品さ」(44)に調和させようとする。ゼノビアが結婚していた事実、ウエスタヴェルトとの結婚においてはゼノビアの方が積極的だったことなどを挙げ、カヴァデイルがゼノビアに読み込むフェミニズムも「彼女の熱烈な女性らしさが必然的にその犯した間違いに気づいた時」生じた「風変わりな、挑戦的性格」(103)の結果であるとし、父権社会の視点からゼノビアを説明しようとする。

しかし、それでも説明し尽くせないゼノビアへの欲望を、カヴァデイルは囚人更生というひとつの目的に勇往邁進するホリングズワースに転嫁し、それを分析批評する形を取るのだ。ホリングズワースが博愛主義的計画という途方もなく無駄なことによって、道徳的に正常な状態から完全にはずれているとしながらも、カヴァデイルは彼の中に「ゼノビアの女性としての魅力に決して鈍感ではないという徴候を少なからず見つける」(78)。ホリングズワースの自分への優しさが女性的であることに読者に注目させ、プリシラのような弱い女性に「無闇に優しくする」(78)ホリングズワースが、実はウエスタヴェルトと同じく女性を搾取や支配の対象としてしか見ていない事実を後で暴露する。そしてこの博愛主義者を「全てをむさぼる自己中心主義」(71)に墮落した怪物であるとやがて分析することになるが、カヴァデイルはホリングズワースにホーソーン的な言葉を使ってフリーエ主義を徹底的に非難させることまでやってのける(15)。ここで注目すべきことは、ゼノビア、プリシラ、ホリングズワースの三人の中でカヴァデイルによって徹底的分析を加えられ、確定的評価が与えられているのはホリングズワースだけだということである。これは彼がカヴァデイルの恋仇であるということだけによるのではない。また、ゼノビアにしる、プリシラにしる、女性はカヴァデイルにとって不可解なものであり、イヴ、パンドラであるばかりかメドゥーサでもあるという理由だけによるものでもない。根本的にはホリングズワースがカヴァデイル自身の投影でもあるからなのだ。カヴァデイルは「ホリングズワースの特異性を誇張し、必然的に彼を引き裂いて、そして当然のことながら、それらを再び寄せ集

めてひどく不恰好なものにまとめる」(69) という危険に言及しているが、これはBRに取りかかる直前に書き上げた短編「フェザートップ」におけるロマンスの作業へのホーソニンの自己批判とよく似ている。さらにその直前において彼がこの憂慮すべき知的研究の対象の例として「自分自身」(69) を挙げているものも偶然ではない。ホリングズワースの怪物ぶりは「主に私達自身によって造られたと言っても過言ではない」(69) と述べるカヴァデイルは、ホリングズワースと「余りに密接に繋がって」(228) いるのである。

カヴァデイルの夢の中でホリングズワースがカヴァデイルの病床を囲み、ゼノビアとキスを交わす場面がある。これはカヴァデイルが自らに禁止している行為であるばかりでなく、自らの欲望を成就させてくれるものでもある。このホリングズワースを対象化、客観化することにより、結果的にカヴァデイルは自分自身の女性観を分析してみせるのだ。ゼノビアはカヴァデイルを透視者に誘うものの実験者と透視者の立場が逆転する可能性とその恐怖を与える存在であり、これとは対照的にホリングズワースの存在はカヴァデイルに透視者であるばかりか実験者、興行師となる可能性をも残してくれているのだ。事実ホリングズワースはゼノビアに催眠術的な力を行使するというカヴァデイルにはない堅固な自己を所有している。彼が優しい気分のときは「その声、目、口、仕草、その他名状しがたいあらゆる表情には優しさがあり、この魅力に抵抗できる男性はほとんどなかったし、女性にいたっては皆無であり」(28)、彼はゼノビアの目を最初に見たときから「その影響を彼女の人生に与え始めた」(29) ののである。カヴァデイルはゼノビアのすべてを知りたく彼女の司祭になることを申し出て拒絶されるが、その司祭の役割を彼はホリングズワースにあてがっているのだ。

ホリングズワースが司祭のごとくエリオットの説教壇に立つ場面は二回あるが、最初の場面では他の三人を、その中でも特にカヴァデイルを感動させる。やがて女性の限界にゼノビアが触れると、ホリングズワースは女

性を男性の隣に位置すべき存在、「女性の明白なる長としての男性がいなければ化け物」(123) でしかないと断言するが、驚いたことにゼノビアは彼の前に屈する。このゼノビアの姿勢は「女性というものは、どんなに知的に優れていても、その個人的愛情がたまたま發揮されないままであったり、阻害されるということがなかったならば、女性の権利や不当な虐待についてめったに騒いだりはしない」(120) というカヴァデイルの女性観を背後から支えることになり、「喜ばせると同時に当惑させ」(120)、「驚かせると同時に憤慨させる」(123) のだ。

第二の説教壇の場面では、ホリングズワースは魔女裁判におけるピューリタンの治安判事のごとく振る舞い、ゼノビアは魔女として糾弾される。だが、ここではゼノビアは「悪魔を悪魔自身の力と同じ力で誘惑することができるほど美しい」(214) のだ。遺産相続権がプリシラに移ってしまい、ホリングズワースに見捨てられた彼女は、「退位させられた」(213) 女王のように見えるとはいえ、ホリングズワースの利己主義を非難する際はローマ帝国に最期まで抵抗したパルマイラの女王ゼノビアの誇り高き女王らしさを垣間見せる。やがて二人きりになったカヴァデイルに対し、ゼノビアは自分の優位への信念を失っていないことを明言しながらも、尼僧院に入ると告げて立ち去る。

だが、女性の愛はホリングズワースのような男性に潰されてしまうものだと考える一方で、ゼノビアはこの範疇から漏れるという意識がカヴァデイルの脳裏を去来する。そのためにゼノビアが尼僧になることを容認しようとはせず、彼はゼノビアの死に固執し、エリオットの説教壇の土台のところに横たわってゼノビアの自殺を夢想するのである。「ホリングズワースと彼女の人生のこの時期の全てのものにも別れを告げていた」(228) ゼノビアが「本当に立ち去ったのではなく、まだその場のどこかにさ迷っていて、その場に幽霊のように出没しているという空想」(228) に彼はどこまでも固執する。

Time, it is true, would steal away her grief, and bury it, and the best of her heart in the same grave. But Destiny itself, methought, in its kindest mood, could do no better for Zenobia, in the way of quick relief, than to cause the impending rock to impend a little further, and fall upon her head. (223)

このようにカヴァデイルはゼノビアの死という結末を闇雲に追い求める。しかしながら、彼女の自殺はBRの世界に不協和音を醸し出す。なぜ彼女は自殺したのかという疑問を抱くのはブラウンソンだけではないのだ。BRの世界に関係するすべての者、つまりウエスタヴェルトやサイラス・フォスターといった男性群のみならず、読者をも混乱に巻き込む理解しがたい事件なのだ¹⁰。自殺を明白なる事実として容認しているのは、興味深いことにカヴァデイルとホリングズワースだけなのである。女々しい語り手と、自他共に認める男性中心社会の暴君の奇妙な絆と言っても差し支えない。女性を感情の生き物と決めつけるホリングズワースに彼女の「復讐的な影」(243)を忍び寄せ、彼を廃人同様にすることによって、語り手カヴァデイルは治安判事と魔法の力関係を逆転させたのだ。ゼノビアを尼僧という生きながらの死の状態に収めずに、永遠に蘇る可能性を残す死を彼女に与えることによって、カヴァデイルはゼノビアの雑草が繁茂する心をそのままの状態に残すことを選択したのである。つまり、彼女を变形しないために翻訳を断念したのだ。そして、同時に、ホリングズワースがカヴァデイルの投影であるとするならば、カヴァデイルは自分で自分を罰する道を選択したとも言えるのだ。永遠に雑草が繁茂するゼノビアの心の影に付きまといられるという宿命を選んだのである。

この彼が最終章で「わたしはプリシラを愛していた」と述べる時、どのような意識でこの告白を付け加えたのであろうか。このプリシラとはゼノビアが死んで数年後ホリングズワースを介護する彼女を指すのか、それとも少女時代の彼女を指すのであろうか。このような疑問を考えると、

ゼノビアだけがカヴァデイルの永遠に循環し動揺する女性観と語りの輪の中にひとり残されるということがありうるかを合わせて考慮すべきであろう。ゼノビアとは対極にあるプリシラにしてもその輪からは逃れられないはずなのだ。いやそもそも彼女が変化していたかどうかということ自体疑問に伏されてしかるべきであろう。十数年前のプリシラはヴィクトリア朝の女性の理想像であり、フィービーのような快活で家庭的な少女らしさもなく、またヒルダのような毅然とした純潔への志向もない女性であった。数年後ホリングズワースを介護する時点に至っても、ホリングズワースの保護者としての優しい気遣いや心配りの他に、彼女の顔には「深い、従順な、相手を疑わない尊敬の念やヴェールでおおわれたような幸せの感じ」(242)が未だに残っているのだ。さらにカヴァデイルの視点や攻撃がホリングズワースに集中していることも見逃してはなるまい。カヴァデイルの視野に入っているのはゼノビアを殺したホリングズワースだけ、言い換えればカヴァデイル自身だけなのだ。カヴァデイルは畢竟ヴェールを被った女性としてのプリシラを愛していることを殊更に強調することで、悪しき循環からの離脱を願っているが、これは逆説的にジレンマを告白しているだけの話なのだ。カヴァデイルにとってゼノビアのマスクはヴェールをつけた女性の白い布より「ほんのわずかだけ透明すぎる」(8)のであり、全身にヴェールをたらしめたプリシラの方が自分を抑制でき、そのため翻訳可能な存在と言えるのだ。そして最終章でプリシラを選択したカヴァデイルはゼノビアに背を向けることで「書く」行為の放棄を宣言したのだ。多くの悩みを与えつつも書く行為を挑発するゼノビア、書く行為によって「悪鬼」から「血と肉を備えた悪鬼」に変化する可能性をわずかながらも残しているゼノビアから逃れんとし、徒に苦闘しているのである。

(4)

BRは降神術やユートピア共同体といった当時流行の素材を俎上に載せつつ、それをホーソーン自身の芸術観と女性観に結びつけた作品である。

それを可能にしたのがカヴァデイルという一人称語り手の存在だ。カヴァデイルが描写対象の人物の心を覗くことに懸念を見せたり、描写する意図に疑問を感じたり、女性を両義的存在とみなしているあたりは、ホーソン自身の芸術観と女性観の投影と捉えてもいいだろう。興味深いのは自己解体に瀕した語り手を設定していることで、ホーソンがそれまで書いてきたフィクションを極限にまで押し進め、さらには永遠に読者を語りの悪しき循環の中に閉じ込めるということをやってのけたことだ。確かにBR以前にもホーソンは自己解体の語りを用いてきた。いわゆるスケッチ群に属する短編は別として、ストーリーを持つ短編では解釈者としての一人称語り手は絶対的な信頼を勝ち得る人物ではなかった。「天国行きの鉄道」の語り手のように世情に疎い純真さを備えていることも多く見られた。しかしそこには純真さに相反するものとして読者に経験を与え、読者に解釈させるという構造があった。

BRは一人称語り手が登場する唯一のホーソンの長編である。この語り手は自分のやることすべてにためらいを感じ、描写しながらも描写することの意味が果たしてあるかどうかを疑わざるを得ない。語り手がこれほどまでに自分の語りを解体する作業が行われた作品はBR以前のホーソンのフィクションにはなかった。ホーソンが自分の芸術の在り方に関して懸念を表明することは頻繁であったが、それは自己解体を主たる目的とした文学作法的作品か、もしくは純然たるフィクションの序文として冠したものであり、作品の動向を決定する語りに入することはなかったと言ってもよいだろう。これがBRで初めて行われたのであり、この事実こそがBRの大きな特色と言える。

南北戦争を間近に控え、合衆国が分断される危機をホーソンが敏感に感じたことがホーソンの晩年の作品減少のもろもろの原因のひとつだったとすることが妥当ならば、かなりのブランクを置いて書かれた*The Marble Faun*を除いてBRがホーソンが完成させた最後の作品でもあるということからして、BRが如何にホーソンのフィクションの転機とな

った作品であるかを主張することも同様に妥当であろう。「非常な意欲を持って人生を始めながら、その意欲も若き情熱とともに衰えてしまう二流の詩人」(2-3)が自嘲的なホーソン自身だとは言わないまでも、BRが転機となったことだけは確かで、その意味で自己解体を追求するカヴァデイルは、これまで幾度となく自己解体を試みながらバランスを失わなかったホーソンのフィクションの行く末を物語っているのかもしれない。

(本稿は1990年5月19日ホーソン協会第九回全国大会シンポジウムで発表したものを加筆訂正したものである)

(平成3年1月15日受理)

注

- (1) Annette Kolodny, "Introduction" to Nathaniel Hawthorne's *The Blithedale Romance* (Harmondsworth: Penguin, 1964), xi-xii. なお、Louise DeSalvo, *Nathaniel Hawthorne* (Brighton: The Harvester Press, 1987), p.115 に引用されているものを参照した。
- (2) Nathaniel Hawthorne, *The Letters, 1813-1843, Centenary Edition* (Columbus: Ohio State University Press, 1984), p. 589. 因にこの "the seventh heaven" はホーソンがメスメリズムに対して用いた言葉である。
- (3) Nathaniel Hawthorne, *The Blithedale Romance and Fanshawe, Centenary Edition* (Columbus: Ohio State University Press, 1964), p. 5. 以下BRからの引用はすべてこの版により、頁数を括弧に入れて示す。
- (4) Nathaniel Hawthorne, *Letters, 1843-1853, Centenary Edition* (Columbus: Ohio State University Press, 1985), p. 466: "I am very glad of your testimony in favor of spiritual intercourse. I have heard and read so much on the subject, and it appears to me to be the strangest and most bewildering affair I ever heard of." ホーソンとメスメリズム、降神術との関係について論じたものは数多いが、Taylor Stoehr, *Hawthorne's Mad Scientists: Pseudoscience and Social Science in Nineteenth-Century Life and Letters* (Hamden: Archon Books, 1978), pp. 32-63, 162-182, Howard Kerr, *Mediums, and Spirit-Rappers, and Roaring Radicals: Spiritualism in American Literature, 1850-1900* (Chicago: University of Illinois Press, 1972), pp. 56-65 が詳しい。
- (5) フーリエの三種類の情動に関しては Daniel Bell, *The Winding Passage: Essays and Sociological Journeys 1960-1980* (New York: Basic Books, Inc., Publishers, 1980),

pp.91-104 を参考にした。なお、超絶主義とホーソーンの芸術観との不即不離の関係については Marjorie Elder, *Nathaniel Hawthorne: Transcendental Symbolist* (Athens: Ohio University Press, 1969) を参照。

- (6) *The Letters, 1813-1843*, p.588.
- (7) Kerr, p.11.
- (8) J. Donald Crowley, *Hawthorne: The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1970), p. 266.
- (9) *Ibid.*, p. 267.
- (10) DeSalvo, p. 97.
- (11) Barbara F. Lefcowitz and Allan B. Lefcowitz, "Some Rents in the Veil: New Light on Priscilla and Zenobia," *Nineteenth-Century Fiction*, 21 (1966), 263-75.
- (12) John Shroeder, "Miles Coverdale as Actaeon, as Faunus, and as October: With Some Consequences," *Papers on Language and Literature*, 2 (1966), 126-139.
- (13) カヴァーデイルがゼノビアを殺害したという解釈は当然のごとく多く提出される。実際に手を下したという過激な論としては、John Harmon McElroy and Edward L. McDonald, "The Coverdale Romance," *Studies in the Novel*, 14 (1982), 1-16 が代表的な例として挙げられようが、殺人の疑いをカヴァーデイル自身に向けさせている語りに注目している例としては Beverly Hume, "Reconstructing the Case against Hawthorne's Coverdale," *Nineteenth-Century Fiction*, 40 (1986), 387-399 があり、カヴァーデイルの語りが殺人を隠蔽しようとしていると読むのは DeSalvo である。
- (14) Stoehr, p. 213 によれば、チャニングがフラワーの肉体的特徴として挙げたもののひとつに "The first was a contraction of the eyelids almost to a point,—a trick caught from near-sightedness,—and then a sudden dilation, till the iris seemed to emit flashes; an effect, no doubt, dependent on her highly-magnetized condition" があった。
- (15) 次のホリングズワースの言葉にはホーソーン自身のフリーエ主義に対する姿勢が窺える。

For what more monstrous iniquity could the Devil himself contrive, than to choose the selfish principle—the principle of all human wrong, the very blackness of man's heart, the portion of ourselves which we shudder at, and which it is the whole aim of spiritual discipline to eradicate—to choose it as the master-workman of his system? To seize upon and foster whatever vile, petty, sordid, filthy, bestial, and abominable corruptions have cankered into our nature, to be the efficient instruments of his infernal regeneration! (53)

- (16) カヴァーデイルの語りを額面通りに捉えることに躊躇する批評家は、フェミニストも含めてゼノビアの死について様々な解釈を提供しようとする。例えば、自分の信奉したフェミニズムの基本原理が偽りのものであったということをゼノビアが認識したため (Matheson)、女性の運命と将来の見通しに対する絶望 (Schriber)、共同体内で発言権を失ったため (Bauer)、カヴァーデイルのゼノビアの死への直接間接の係わり、既述したカヴァーデイルの手による殺人説 (McElroy and McDonald, DeSalvo、精神分析的フェミニズムを展開する Tracy) 等がある。Terence J. Matheson, "Feminism and Femininity in *The Blithedale Romance*," *The Nathaniel Hawthorne Journal* 1976, p. 223, Mary Suzanne Schriber, "Justice to Zenobia," *New England Quarterly*, 55 (1982), 76, Dale M. Bauer, *Feminist Dialogics: A Theory of Failed Community* (Albany: State University of New York Press, 1988), p. 27, Laura Tracy, "*Catching the Drift*": *Authority, Gender, and Narrative Strategy in Fiction* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1988), pp. 125-126を参照。